

2007 年春学期のまとめ

提出日: 2007/05/14

氏名: 池上 真

□ クラスについて

今学期に受講したクラスは、デフカルチャー(ろう文化)、アメリカ政治、ヨーロッパ政治、立法過程、模擬裁判、体育(ウェイトトレーニング)の6つである。

まず、デフカルチャーのクラスは、デフスタディーズ学部が開講しているクラスの一つであり、このクラスを受講するためには、先立って、「デフスタディーズ(ろう者学)」というクラスを履修していることが条件となっている。去年の秋学期にデフスタディーズを履修したが、さらに「ろう」についての知識を深め、また様々な視点から捉えてみたいと考え、このクラスを受講を決めた。クラスにおいては、アメリカで最も評判の高いろう文化に関する三冊の文献を使用した上で、学生同士によるディスカッションを中心に進められた。学生の中には、ろう学校出身者、インテグレート出身者、デフファミリーの出身、聴者の親から生まれたろう者など、それぞれ様々なバックグラウンドや経験を持ち、興味深いものがあった。特に私が一番興味を持ったのは、人工内耳に関するテーマであった。現在のろう教育において、最も議論が繰り広げられている人工内耳の装用の是非に関する問題についてディスカッションするにあたって、クラスの中で寸劇を行った。具体的には、クラスの始めに教授より一人一人の学生に役が振り分けられ、私は、第三世代に渡るデフファミリーで育ちながらインテグレーションで教育を受け、人工内耳装用を決意しながらも悩む17歳の高校生(主人公)を演じることとなった。その他の設定として、その主人公は、聴者の彼女と交際しており、ろうの両親だけでなく、彼女にまで人工内耳装用を反対されるが、自ら人工内耳専門の医者やソーシャルワーカーに相談し、様々な情報を得て考慮した上で、最終的に人工内耳装用を決意するという流れだった。このような状況設定の下で、主人公の立場に立って、どのように行動を起こし、どのように自身の考えを周囲の人に対して説明していくのかについて考えながら、約10分間の寸劇を行った。この経験を通じて同じろう者同士でも、自分とは全く異なる生活背景や価値観を相互理解し、受容すると共に、日々ろう者としてのアイデンティティを再構築していくことの重要性を認識させられた。

次に、アメリカ政治のクラスは、2部構成となっており、基礎を去年の秋学期に受講し、今学期は応用という感じのクラスであった。クラス内では文字通り、アメリカ

の政治のしくみや、現在最も活発に議論されている時事問題について学んだ。特にイラク戦争、健康保険の導入問題、教育制度などに関わる問題である。それに関連して、2008年に行われる大統領選挙に関してもしばしば取り上げられ、クラスに出席する前に、教科書だけでなく、テレビやインターネットにも目を通し、政治面の記事をチェックすることが求められた。秋からの約1年間に渡る講義を通じて、アメリカ政治の全体的な仕組みや課題を身をもって理解できるようになった。このクラスで使用した教科書はかなり分厚く重たいものであるが、アメリカ政治について幅広く、かつ分かりやすく記述されている。この教科書は、今後法律またはそれ以外の専門分野で学ぶにあたって大いに役に立つものであり、とても重宝するものと思っている。

ヨーロッパ政治のクラスでは、日本でも話題となったEUと呼ばれる欧州連合の設立背景や歴史、構造について学んだ。毎回のクラス毎に小テストが行われるため、事前予習が欠かせなかったが、その甲斐もあって、欧州連合に加盟する25カ国それぞれの政治のしくみや経済に関する問題を幅広く学ぶことが出来た。また、このクラスでは中間試験や期末試験だけではなく、リサーチペーパーやグループによるプレゼンテーションを課せられたが、リサーチペーパーでは、デンマークにおける結婚を望まないカップルのために結婚同様の権利をほぼ認めたパートナーシップ法を取り上げ、その法律の成立背景や国民意識への影響について調べた。一方でプレゼンテーションでは、クラスメイト2人との共同作業で、欧州連合の地域政策について調べ、発表した。これらの課題を通じて、学問的な内容を第二言語である英語やアメリカ手話で表現することの難しさを実感したが、大きな経験になった。

立法過程のクラスは、アメリカにおける法律制定に至るまでのしくみや流れについて学ぶものである。前述のヨーロッパ政治のクラスと同様に、毎回、クラスの初めに小テストが行われるが、ヨーロッパ政治のクラスと違い、このクラスは選択回答形式ではなく、記述回答形式であった。約2年間の留學生活で、日常生活レベルの英文を書くことには慣れて来たものの、クラスにおいてアカデミックな内容の英文を書くことは、今の自分にとって到底おぼつかないものであり、今学期のクラスの中で最も苦勞したクラスであった。また、クラスではアメリカ政治に関するニュースやドキュメンタリーのビデオを見て、ディスカッションを行ったが、アメリカにおける政治家(国会議員や州知事、裁判官など)の名前が多く出てきたためか、ディスカッションについていけず取り残されてしまうことも多々あった。

Gallaudet 大学は、ロースクールこそは設置されていないものの、なぜか MOCK COURT(模擬裁判)というユニークなクラスがあり、毎週金曜日の夕方5時から7時まで、ワシントン市内にある法律事務所へ足を運び、実際に資格を持つ弁護士による講義やトレーニングを受けた。当初は、裁判の進め方についての基礎講義

が行われ、その後、検察側と弁護側の二つのチームに学生が分かれ、それぞれ別室にて、本番に向けて冒頭陳述、直接尋問、間接尋問、最終弁論と裁判の進行にしたがって、一つ一つのイメージ訓練を行った。本番というのは、クラスの最後に裁判所を貸し切り、模擬裁判を行うというものであった。ちなみに、自分は弁護側の一員となった。事案は、ある日、高級宝石店で強盗事件が起き、被害者の目撃証言や盗まれた現金の硬貨から発見された指紋などから、メジャーリーグでの活躍が期待されていた有望な人が逮捕されたという設定である。一方、事件のあった日に容疑者は、親友が経営している車の修理店にいたというアリバイがあり、また、被害者が容疑者を認定するときに、警察が「この人がやったんだろう？」と誘導したという証言も出ている。チームが決まってからは、どのように容疑者を弁護していくか、週2回、同じチームのメンバーで図書館や寮のラウンジに集まって、ミーティングを行い、議論を重ねてきた。本番で証人に尋問したときに、まったく期待はずれの答えが返ってきたとしても、動揺せずに、証人とのアイコンタクトを保ちながら、コミュニケーションができるように、何度も何度も事案に目を通した。模擬裁判の本番の前夜は、ずっと事案に関する資料を眺めていた。当日は、DCにある地方裁判所で模擬裁判が行われたが、初めて見るアメリカの法廷の光景を目のあたりにし、感動のあまり言葉が出なかった。常に学生の身になって懇切丁寧に指導して下さった弁護士や、留学生の立場を理解し最後までとことんと付き合ってくれた同じチームのメンバーなど、協力的な人々に恵まれながら、チームの一員として自分の果たすべき役割を最後まで全うすることが出来てよかったと思っている。

最後に、体育(ウェイトトレーニング)のクラスでは、フリーウェイトやトレーニングマシンの使い方やそれらを使うときの注意点を学んだり、体力検査を受けたりした。学期一番初めのクラスに行われた体力診断テストの結果やそれぞれの学期の目標によって、トレーニングプログラムを作り、通常のクラスでは、それぞれ各自のトレーニングメニューをこなした。今まで趣味で友人と一緒にジムに行ったりしたことはあったが、プロである教授の指導の下でトレーニングを受けることが出来たのは貴重な経験となった。これからも勉強だけでなく、定期的に体を動かし、体力増強や健康維持にも気を配って生活を送っていきたいと思っている。

□ アルバイトについて

今学期は、週末の金土日を除き、午後2時から5時まで、キャンパスライフのアシスタントとしてアルバイトをした。主な業務内容は、去年の夏休みと同様、ベッドメイキングとパンフレット作成である。学期の始めは外部のビジターからの宿泊の申込が少なかったが、春休みを過ぎた頃から、宿泊の申込が増え、忙しさが増す

ようになった。そして、5月の期末試験終了後は、卒業式のためにその忙しさはピークを迎え、猫の手も借りたいほどだった。この経験を通じて、第一言語として手話を使用し、特にコミュニケーションに不自由を感じることなく、業務に没頭できるという環境は、ギャローデット大学ならではの魅力であり、第一言語としての手話に誇りを持つと同時に、他の言語を話す人とのコミュニケーション方法を考え行動することの重要性を認識させられた。

□ ロースクールの出願状況について

1月の終わり頃からロースクールへの出願手続きを始め、各学校からの回答を待ってみたが、残念ながら、これまでのところ受け入れ通知をいただいた学校が一つもなく、当初の目標であるロースクールへの進学を実現することが現実的に難しいといわざるを得なくなった。しかしながら、今回の留学における本来の目的は、聴覚障害者に関する Americans with Disabilities Act; ADA (障害のあるアメリカ人に関する法律) に関する実態や現状を臨床的に学ぶことであったので、今後は、ロースクールに代わる進路として、じっくりADAについて調査および研究できる大学院への出願も検討してみたい。